

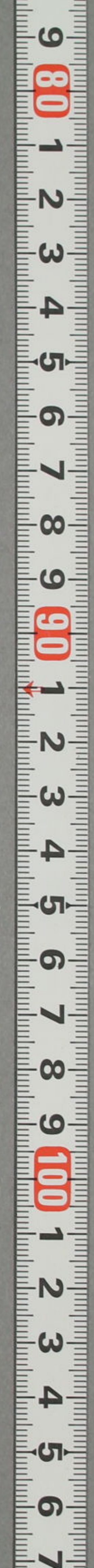
金石文叢稿本

駿河甲斐
伊豆八丈島
小笠原島

十三

特別
手10
4622
13

3



410
4622
13



不忍文庫金石銘類 駿府志略寺部

駿河淺間祠別當總持院銅磬銘

伊豆御山常行堂磬建保元年癸酉拾

貳月拾參日檢非違使右衛門少尉藤

原朝臣光員



駿河

不忍文庫金石銘類

駿河三保神社金鼓銘

奉施へ三保大明神御寶前□□

文保三年乙未正月十二日神主具長

□女

不忍文庫金石銘類

駁河淺間祠別當總持院鰐口銘
御嶽山奉納元龜元年八月吉日右京
進華押

駿河與津清見寺石浮圖銘

前在門

慶山一居士慶安二己丑年八月十五日
生國參州岳寄為仕官住北之國田
中清左衛門尉長五云云

駿河柴屋寺石碑

面

天柱山吐月峰連歌師宗長舊菴地柴屋禪寺

右側

菴重器茶釜一節切

左側

享祿五年三月六日宗長卒

背

明和元甲申八月本多忠榮建之

長崎行役日記 第七十才
明和四年九月九日 條 長久保赤水
丸子川橋より北へおろすゆえに、柴屋寺より、連歌師
宗長の舊跡有り云々

官報第六十一号

明治十六年九月十日

駿河国有渡郡丸子宿柴屋寺保存資金ノ内ハ金
五拾圓下附スル旨去月廿三日内務卿ヨリ静岡
縣へ達セラレタリ該寺ハ文明十二年連歌師宗
長ノ創立ニシテ国司今川氏親之ニ結構ヲ加ヘ
臨濟宗ノ梵刹トセシ処ニシテ其境内ハ吐月峰
ノ麓ニシテ頗幽邃閑雅ノ風致アル名勝ノ地ナ
リ(静岡縣報告)

旌義碑

駿府驛家石垣氏初子為富資後頻罹蓄田產耗廢
人口散損奴有八助獨苗不去營救百端主家盡倚
辦積三十年寶曆中事竟違官褒賜錢五萬都邑傳
記云初石垣氏有女無力覓壻主母又思八助久勤
欲以女報典之八助依法不從洎稟賜錙銖不私推
供主家用女賴得嫁他家後主家皆老亡無男八助
持喪頓踊悲泣感動同巷歲時薦享尤謹皆如事生
人或賙以錢物必市果食薦之撤如更受賜輒共鄉
鄰所識者共餽既改從良繼石垣氏藉家業已窶昇

輜織扉自給以天明四年死甲斐人源昌樹倚居府
 中親悉欲其事宣延因極遂以五年冬建碑于驛西
 口蓋昌樹意在勸民之義武威處士豐幹承其託即
 石是題銘曰懿厥義類允秉乃孚及此賴覆思慎勞
 劬哀我嫠獨遭尔不孤其彛是母民肯於謳侯誰啟
 癸吾道茲符汝倫茲何尚為箕徒瞻言思之褒表叢
 軀爰鑄貞石永昭範模

鈴屋集六

四才

駿河國安倍郡木枯森八幡社前碑詞
 木枯森者駿河國在斐者古今六帖之歌以斯良
 延阿倍郡尔在斐母風土記尔所見而宇都母那志
 抑此森者彼六帖在乎始登為而後撰集在歎伎之
 歌又定家乃卿之下露乃言之葉何登自古於世名
 高久所聞且今母佐陀迦尔服部乃色云邑之地尔
 在而伊登神佐倫在慶尔奈母有祁流伊都伎祭神
 者斯母掛麻久母可畏廣幡之八旗大神然婆加理
 奈流名所尔斯鎮伊坐者此母甚比佐佐那流社尔

許曾波伊麻曾加流良米此社近伎年未由由斯久
荒坐斯乎邑長那流石上長隣伊勤志美有人尔
可畏久歎愁而心乎起志力乎致志且又美麗玖修
造奉礼流神伊都伎能於年加志佐波更尔母不言
古偲雅情乎母也乃人能心将有闻喜俗見喜而森
之水葉乃年乃葉尔繁榮而無絶世如夏萬代麻傳
尔不偲米夜不仰米夜如此言者天明乃七年云年
之五月乃月立伊勢人本居宣長

每古雜誌三篇第九号

本居宣長寄粟田土満昏翰抄出

先達テ木枯森碑文御轉達御頼申候処御届被下
候由此度駿府野沢氏ヨリ右挨拶、昏状奉御届
被下慥、落手仕候且又右、謝儀トシテ金二百
匹被相贈是又落手仕候右返夏遣シ申候間乍御
世話御轉達被下度尚又宜ク御挨拶奉頼候右野
沢氏ハ駿府清水尻少將并社中ト昏状ニ有之候
左候ハ清水尻ト申ス所ノ少將并社ト申ス社
司ニテ御坐候ヤ木枯森八幡社ハ此人ノ兼帯ニ
テ御坐候ヤ様子承度奉存候

又一通抄出

木枯森石碑出来石摺り御見セ下サレ辱奉存候、
甚見度ニ存ラレ候野沢氏へ御序ニ宣シク被仰
遣可被下候右石摺りハ此方ニ留置申度候元ヨ
リ其積リニテ御越シ被下候哉トハ存候トモ
一往御尋申候也

高田宜和贈母古社主文抄出

連
丸子駅ハ有渡郡ニテ此駅中ヨリ西北三四町ニ
シテ吐月峰深屋寺アリ達哥師宗長コ、ヲ字泉
か谷ト云フコ、ヨリ觀昌院坂ト呼フ小坂ヲ越

エテ北方安倍郡羽鳥村舊服部ナニ木枯森アリ
安倍川ニ落合ヲ此森ニ鈴屋大人ノ碑文アリ此
藁科川中ノ丘此森ニ鈴屋大人ノ碑文アリ此
碑マタク野沢翁ガ有志ヲ勸メ立テシ夕ルナル
ベシ裏面ニ姓名アリマ夕ガ親族ノ大人ヨリ野
覚ユ是翁モ後尺廣アリ宜和ガ親族ノ大人ヨリ野
同ヒ申スベシ下略

每古雜誌三篇第九号

野澤翁碑文

野澤翁姓々源名々昌樹といふ元甲斐国人にて
新羅三郎兼光主の裔と云々聞ゆる遠津祖は世
世信濃国佐久郡野澤と云地小其わたり廣く知
る有者当代足利氏の末代世乃乱小はふれさす
歴ひ了兄弟三人甲斐国小往て武田氏小属きて
有けるを太郎と次郎と云々参河国長篠美濃国善
城尔と山縣昌満の手に在て戦死三郎の幼くて
残れる有者巨摩郡篠原村小生立ける斯るこれ
の末代小其地に郷士と云者小了有きるを翁の

父小至て他の家を嗣ぎ、国府の城共力と云者
にあり、其翁を享保七年に生ゆ、父の名ハ為信、母
は齋藤氏、小て有ける翁父の跡を継て八年
仕給き、小其ほと厚しくのみ有きれば仕へを
仕給く、巨摩郡竜王川乃邊に往て、歳頃江戸に往
通ひ、多黄葉山乃笛吹東儀某小筆策を学ひ、田氏
の横笛を傳へき、又琵琶箏の琴を每みて、常に搔
鳴し、片こ心を慰欠け、明和の初小故ありて、此
駿河小棧り住めり、其取年四十五に南有け、子
醫師乃わふを業として、始々鞠子の里に在る、後

小府中に身従り住きり、死て五年をり有て、
都に登り、綾小路大納言殿お参りて、郢曲城学ひ、
归来て家を少将井社の傍に役し、元々皇国
の道を尊ひ、神祇伯白河殿の教子ある、皇歌を好
み、多日野大納言乃教を受た、里々人を導人、事或
思ひ、孝子の傳を昏き忠夫の碑を立て、古を志
の飛多木枯ぬ森に石ふみと、りて建きり、若き
程より妻子なとも、なたらす、立たる趣世小異に
て、いと雄々敷、挽める所無くと、齡を積り、ても所
謂益壯ある者にて、老月きたる、変更も無りしを

世のことと己の里ハ逃れぬ己此とて假初の慍おそ
多らと寛政十二年云年閏七月七日一七十九歳
の齡をとち免れて終小身罷り然有渡郡鞠子里
あり長源寺の山乃本と里にをさるを盛高院昌
山全樹居士と後此名法をもつ翁もと兄弟七人有
し皆先多ちて失ぬ常に歌とみかえし・友又絲
竹の道学へ不徒哀み志の飛て在し吾亦見聞及
夏乃趣を今この取詠る歌と共にかく石小巻記
し置に南也

心印くほきしを此身と梓ゆみふへらぬ旅の

道もまよふ寸昌樹

高田亘和寄蚤古社文抄出

本誌三篇第二号山縣大貳ノ墓ノ下ニ野沢豊後

昌樹云々清水尻ニ住シ云々又斯レハ追放ト成

リシ後ハ駿州ニ至リテ居住セシ者ト見エ夕リ

下有テ其墓所ノ夏ニ及ハサレハ中彼奥城ハ東

海道丸子宿ノ内字赤目ガ谷官道津谷村トノ半ニ

凡ニ宿中ヨリ起木天神社ニ鄰レハ臨濟宗ノ小寺

靈泉山長漁寺ニ在リ碑正面ニ甲野澤昌樹墓ノ

七字アリ右側野澤翁姓云々ト假字交リノ文章

九行裏面十二行有テ辞世ノ歌ヲ彫夕リ此文章

苔山シテ分明ナラス、僅ニ辞世ノ歌ノミ、苔ヲ破
リテ写シ侍リ、恙ニ写サ、ルハ遺憾ニ候ヘ、氏唯
一人殊ニ木蔭暗ク、黄昏近ク、老眼覺束無ク、住僧
ヲ伴ヘ、氏斯ル夏ニハ心薄キ人ト思ハレヌレハ
後日ニト残シ侍リ、サテ過去帳一見ヲ乞ヒ、住
僧云、此寺ハ無住ニテ年、月、経シガ故ニ、定カナラ
ズナト云ハル、後日、右ト裏面ノ文字ヲ写シ得ハ
足リナト思ヒ侍リ、略下

蘿徑記碑

羽倉簡堂

何山無萑楓之徑、而此特着於後世者、豈非以
在五中將之詞藻故哉、按其傳曰、中將體貌閑
麗、好和歌、其蒙勅東下、命曰求歌、枕而還、而勢
語亦載、既到駿河國、將入宇都山、道幽昧而細、
萑楓翳密、其和歌又寄託哀怨、勅采入新古今
集、後人艷稱、取其語名曰萑細道、其蘿徑云者、
辭人所脩云爾、今不必改也、山南小路、即為蘿
徑口、北行崎嶇、穿穴一千餘步、始達於賴左草
槁側、而山椒正見、不盡峰於東面、則與僧宗祇

新古今
 玉葉
 参叔雅座
 中井宗尊親王
 長久保赤水
 長崎行役日記
 明和元年九月九日の條

長崎行役日記 第七十才
 明和元年九月九日の條 長久保赤水

宇都の山名物有りて 十團子と賣りけり歌
 玉葉の細道を、茶屋の出るる所の山は間より

過宇都山

秋風千里外、嵐、搗衣聲、薄暮、葛羅路、旅
 人、侵、雨、霧、行、

韓

韓村先生遺稿

六詩丁之部

踰宇都山懷羽倉縣令巡撫海島

君在絕海一葉船島嶼星散水吞天我度荒山三戶

馱雲對春益翠如烟都門一別恍似夢背馳西南路

用

幾十閱說南洋風潮惡前有暗礁下老鰐胡舶蠻檣

動齋粉或又飄散投冥漠誰去此中撫島民文武威風

君其人報國固已甘艱難冥祐吉人有天神看君注

年宰閩西寓意為旌王孫蹊舍奮謀新世人態修廢

與滅有所獲碑字讀罷君不見宇都山邊杜鵑啼

氣吹舎文集二十八

新庄道雄碑

平田大壑

新庄道雄そのいひ名を甚右衛門といふ国府乃
江川町のさと長とていと奮き家なりとぞ道雄
をさるくて父におくれとせと家の業をつぎ勤
めたり母の事多岐道となくし其教ふちく順ひ
殊亦と江川よりと書とむあも好みて大倭乃
からのあ子能乃嬉ひれく傍へは積おきて志を
し家を出るふとぬとこ放して讀むるを其行
事の中にも皇国の勲功を尊び實のみや此の哥

おきて北川真頼かとい口をも傳ふは其道小
いより深くまはれ字を柏花といふおそれこの
道雄も安永五年といひはる歳の生れも己
と同じ年ならけしや殊におむら鬼あはて四十
をりけ比より吾もかきりて駿河乃國誌を
えらひ立多れ文一卷の稿成々おとに江戸へも
て来家己と思ふむを必問ひかつこれと小記
さる考説ともを讀ておられ九悦比おとし
ま己のおさけ助々し事もあはらあり此人の道
お雄雄しくいそしめ事ハその國誌お志る勢

新考説ともお免れを見ず知をさしおをこ
その妹の頃より居、勞ハ事此ありしがつひ
お重里してゆきて志す寸の十日満里九日やい
ふ日おかれ百足らけ八十乃隈道おらく去り
多と子らかもやより告おあせとるおおよし
言ふやとけし思は惑は悲しむといふも更な
り道雄いせおありしおと里乃事ともよくたま
て先おたおつものお蟲お家多いや傳しおぬえ
ゆく防お惑ひし時にを退くるみちを考へ
廣くおをしへ多其害をやめまは常おいらゆ

る鰥寡孤獨のまゝへあまらざるをすくい人のむ
つひ乃中たちなとよくとり行いつひの遠く道
に相知る人らありあまらざるに志とい頼みて在り
まはあまらし思ふえあまらざる此世を傳かざるに
悲し惜す人多人もいと悲然るにあとむ子らを
一へ子を相えり里を其以しふみ立て、世に楚
の名し詠を傳へおとすいりて已にその由は
受てせ請ふふあまらざる世の大よる人乃あし得たる
事もあたらあまらざるし記石多あまらざる名を求
むる類あら福の心のえあまらざる相うあまらざる其

子等の心辨をるあ思をやりてまた更に涙おし
あまらざるあまらざる

えあまらざるあまらざるし楚福あまらざる道あ雄雄しき
をあまらざるあまらざる

天保七年といふ年あまらざるあまらざる

不盡河修堤碑

鹽谷石陰

不盡河發源於信之八岳南流經甲州與苗吹諸水合繞不盡嶽麓乘高注下以入駿州悍急犇猛勢如激箭及其漲也潰決四出患害最鉅安政甲寅冬駿河地大震河身綻裂噴沙成洲高二三丈其東呀然地陷河流忽徙明年六月大水堤坊決壞丁巳之歲自夏涉秋風雨數作河水溢溢七月廿九日風益猛雨益暴崩坊二百餘步民皆流亡轉遷翌月計吏露木邦憲工吏佐藤嘉長自江都適與工吏嚮在駿者六笠敬明等按視各處謀曰民急矣奚遑俟命乃發

徒即役。審地勢。鑿溝渠。長三百五十餘步。使水勢有所醜。河濱有大石。可周千餘尺。因築堤一百八十餘步。以距大石。又就水衝。列壘石。延袤十有八步。以捍水怒。明年三月功竣。堅牢如天造。於是曩之流亡轉遷者。扶老攜幼。以歸復業。田畝漸墾。桑麻漸殖。是役也。計曹長攝津守土岐朝昌。首決議。以總理工事。父老翁然相謂曰。吾民得免為魚復鄉里者。壹賴土岐公之仁。公家章用桔梗花。請名是坊。曰歸鄉堤。以桔梗與歸鄉。邦音相通。冀子孫累世莫忘桔梗公之澤也。父老又謀創祠於河濱。以祭水神。建碑以表其功。

來請余文。顧前三十餘年。予西征經駿州。濟所謂不盡河。河之左右。彌望數十里。白沙黃茅。絕不見人烟。問之。則由客歲戊子之災。云爾。時嗥嗙之狀。昏墊之態。躬親覩聞。為之慘然。丁巳之害。蓋鉅於戊子焉。夫防河大役也。濟民鴻澤也。是堤之成。非內外官司上下吏胥悉獲其人。而民皆勸事樂功。競竭其力。烏能如斯之亟且牢也哉。凡用工九萬六千人。用財若干萬金。前後董役者。除邦憲等外。計吏小高助堅。保田謙。乃工吏稻田忠室。小林儀型。而請予文者。里正彌兵衛也。銘曰。

凡厥即功	匪勇靡決	匪智靡籌	匪仁靡達
堤之始壞	民艱備卒	能吏明斷	工徒即發
乃堵乃楸	乃築乃實	素期弗愆	課程秩秩
土跳石盤	神造鬼設	緊旄挈倪	緊姑從姪
載來載歸	爰安家室	田疇斯蓄	梗稻斯茁
鷄犬熙熙	馬牛駉駉	吾侯之惠	人免魚鼈
寔仁寔智	神乎惟佛	勒諸貞砥	千古芳烈
謂吾言譎	問之皦日		

桂叢居士墓銘

伊勢齋藤謹撰文

桂叢居士、姓素原氏、名心望、字三五、又字民之、島田
 驛人也、其父莎堂以善書名世、兄霜涯亦工筆札、名
 垂於父、居士獨以画法名、於是素原氏之文雅、一取
 輝映、海道云、余往返海道者二十餘回、公程每嚴、不
 得過、訪人每抵大堰河、又不聞公、無渡之唱、津卒擡
 輦、輦勿勿載去、人皆苦阻水、余獨恨無阻水之患、不得
 信宿於島田、則欲造素原氏親挹其雅韻、以洗客衣
 之塵而不能也、居士以素原氏出嗣冢本氏、為驛長、
 清廡稱職、為人羸弱、善病、中年讓家產於其族弟而

歸宗退栖於驛北金子澤禮先舊廬名曰更幽山房
以其有山水之勝也既而又就宗家大樹下構一屋
曰躬柯精舍索余書為扁妻歿不再娶蒲團習靜然
香品茶每接文士座客常滿與未吃毫寫流峙一筆
不苟初學於勾臺嶺遂採諸家精英別成一家画名
日熾未學者衆而天不假之年宿病復動溘焉而逝
實安政五年七月某日也享年僅五十二莫鬼於清
隱山傳心寺其先塋也遠近會葬者數百人配即冢
本氏之長女生一女大門人輩謀立墓石未乞銘於
余余常恨不識居士父子之面乃不辭而銘之曰

水陸雜遝馬嘶人呼中有高士因寄結廬心遠地偏
杳出塵外山水在座又竿立画迂倪癡黃殆入其室
今也則七空觀遺筆

同部詮實篆額

秋原暈書丹

廣羣鶴刻

實割梅之記

勝海舟

駿河の城に御庭に梅樹あり。咲出花乃色
 香のみならず。むす傍に實も。世に類なく。核は
 木のつら。種直る。核を利。其名を實割梅
 と云ふ。昔。東照御神の御手。移
 植給ふ。と云ふ。明治の御事ありし。咲
 出花。色香ハ昔。小か。え。久。いと。愛。と。々。き。と。後
 後。其。故。と。し。傳。ふ。る。人。の。稀。小。な。り。行。む。ふ。國
 人。之。能。此。宮。司。竹。齋。出。島。此。翁。深。く。な。り。き。遠。く
 木。也。御。社。の。御。前。尔。移。し。植。し。也。花。知。る。あ。ら

明治十五年八月

ぞ。い。う。子。う。き。し。け。思。ふ。庭。先。は。く。御。神。也。其
ま。先。し。心。を。一。を。愛。給。ふ。ら。し。あ。く。小。請。為。る
人。と。此。花。城。見。此。色。を。も。香。を。も。袖。も。と。先。作。く。
古。を。志。み。ぬ。今。成。れ。も。世。多。奉。り。幣。と。も。那。し。奈
婆。心。に。塵。も。も。お。い。し。う。那。り。多。神。の。御。先。を
身。老。い。や。去。あ。存。ら。む。を。思。ふ。に。南。無。

明治九年九月

勝安芳志呂次

右刻石在久野山東照宮前明治十一年扈蹕之次往觀焉誠

佐野原神社碑記

谷于城

嗚呼喜順憎逆者天理之心人所賴以生也故千
苦萬艱殺身以報王室若新田楠名和菊池諸公雖
經千百歲之久儼然如生人皆畏而敬之彼殘賊之
徒雖或逞一眦身死國亡醜名獨存愴父牧豎猶且
愧齒焉是豈偶然哉孟軻氏曰人性善噫信矣頃者
駿人服部大八介三女維堅來請曰我駿東郡佐楚
原者建武之役左近衛中將贈從三位藤原為冬公
戰死之地也有古墳十有三其所謂將軍塚者乃為
公墳墓土人相傳展拜無怠自王政維新南朝諸公

及其他死王亥者所在崇顯而公瘞骸處未有表見
恐終將泯沒於無聞是豈非吾輩之責乎於是衆相
謀醜賞上請建祠以安神靈歲祀禋祀稱曰佐野原
神社取明治九年也而未有碑文願有記焉余聞之
擊節曰有是哉駿人之毋義也既展於其墓又建其
祠以致誠闡風者亦有所與起况就其地而拜其祠
者乎按公權大納言為世公之子為定家公玄孫家
世以詞藻著而公有韜略之才妹為子入後醍醐帝
宮生尊良宗良二親王尊良之東下討賊公居股肱
任師敗死之史稱公衝敵陣自名而沒其壯烈可想

贖

見賊臣尊氏視其首級猶且哀惜焉則公之為人亦
可知矣惜乎史有闕文公之亥跡隱贖不明然而數
百歲之後駿人追慕如此則喜頌憎逆之為天理豈
不益彰明赫著哉嗚呼駿人之忠厚因公愈顯而公
之忠烈亦因駿人益明於天下神人和暢而風教之
道存焉余故不辭而為之記明治十五年六月

陸軍中將從四位勳二等谷干城撰

大日本史曰藤原為冬權大納言為世子任左近衛
中將且利尊氏之及中務卿尊良親王東征尊良兵
敗於竹下退佐野原敵軍未追為冬戰而死之尊氏
素與為冬有舊特哀惜焉

○太平記曰建武二年十二月十二日左近衛中將
藤原為冬戰死

○南山史曰藤為冬其先出於中納言定家世以倭
歌名家號二條父曰為世任大納言為世女子夙入
後醍醐宮蒙電毓數皇子以故為世亦被電遇帝之
南遷留夏北主為冬以父蔭任左近衛中將尊氏之

叛、逆尊良親王東征、竹下之戰、王師敗績、為冬退、奔
佐野、魚敵未蹶、遂戰歿、尊氏雅与為冬有舊、聞其死
特哀惜云

○梅松論曰、翌十二日、建武二年、京勢駿河ニ引退、
佐野山ニ陣ヲ取、處ニ大友左近將監官軍トシテ
其勢三百騎ニテ下向シ、夕リケルガ、御方ニ参ス
ヘキ由申ケル間、子細有間、鋪旨仰ラレケル程ニ
當所ノ合戰、矢合ノ時、分御方加ハリテ、合戰ノ忠
節ヲ致シケレハ、敵陣早ク敗レテ、二条中將為冬
ヲ始トシテ、京方ノ大勢討レ、又此為冬ノ朝臣ハ

將軍ノ御朋友ナリシカハ、彼頭ヲ召寄セ、御覽有

テ、御愁傷ノ色深カリキ

○南山巡狩録曰、十二日、建武二年、午刻ハカリ
箱根竹下ニ相戰フ、此敗官軍ニ於テ、中務卿尊良
親王及ビ脇屋義助ノ向ハレケル竹ノ下ヨリ軍
敗レ、二条中將為冬朝臣此所ニテ討死シ、玉ノ程
ニ、殘ル勢或ハ討レ、又ハ落往夕リ
○通語曰、十二月十二日、建武義貞及直義戰于箱
根、義助佐親王尊良及尊氏戰于竹下、親王軍皆王
家僕隸、不知兵、其鋒五百先与敵遇而走、敵軍追北

赴王之陣義助以其軍橫衝奮擊卻之略於是大伴
貞親佐、木高貞軍于後以其衆降尊氏甚射王師
潰中將為冬死之尊良義助以數百騎西走

上陳書

誠恐誠惶百拜頓首靜岳縣第一大區三小區駿河
國駿東郡平松新田副戶長服部大八謹而奉言上
候御維新以來大政隆興百般美事頻行ハレ
僻陬邊土ノ小民マテ無窮ノ皇恩ニ浴シ漸ニ開
化ノ域ニ進歩シ鼓腹拊躍活業罷在候随テ小民
大八謹テ奉拜承ニ報國殉難ノ士中古楠公ヲ始
メ忠勳ノ臣茶々神跡勅許被為在官國縣社ニ御
加列相成加之近世忠死ノ輩又ハ國更ノ為ニ斃
レ候マテ東京招魂社ニ御祭祀被為在候義無上

、御制典ト難有奉感戴候爰ニ當平松新田儀ハ
舊名佐野魚ト唱一候魚野ノ内ニテ昔昨建武ノ
役叛賊且利尊氏追討トシテ節度使新田義貞朝
臣東下ノ刻朕屋象助朝臣竹ノ下口ヨリ進撃ノ
節不慮塩谷大友ノ徒反心賊ニ降り翻テ王師ノ
背ヲ乱射致シ官軍之カ為ニ利アラズ退軍ノ際
左中將二条為冬朝臣其他ノ從士数名ト共ニ佐
埜原ニ戦死ヲ遂玉ヒ又土人其忠節ヲ悲シ遺骸
ヲ埋メ墳墓ヲ築畢實口碑ニ傳ハリ塚数十三
今猶致存在居昔昨ノ面影残り罷在候就中為冬

朝臣墳墓ハ土人今ニ呼テ大将塚ト称シ連年十
二月十二日不急私祭仕候方今殉国ノ靈寛御賞
祭ノ折柄獨為冬朝臣聖恤ヲ蒙ラザル公ノ不幸
ト里民共深ク奉歎息候仰願クハ右隻跡御查點
ノ上更ニ社弔御許可被成下自今鄉村社ノ列ニ
御加一相成候様仕度村民一統希望罷在候間此
段不顧忌憚奉言上候誠惶誠恐頓首百拜

靜岡縣第一大區三小區

駿河國駿東郡平松新田

服部大八

明治八年九月廿五日

静岳縣令大迫貞清殿

書面上申之趣聞届候條落成之上別命雛形准

明細書可指出事

明治九年四月十八日



静岳縣第一大區三小区駿東郡平奈新田鎮

座字十三塚

一佐野魚神社但有式外最土人尊崇致シ平吹參詣

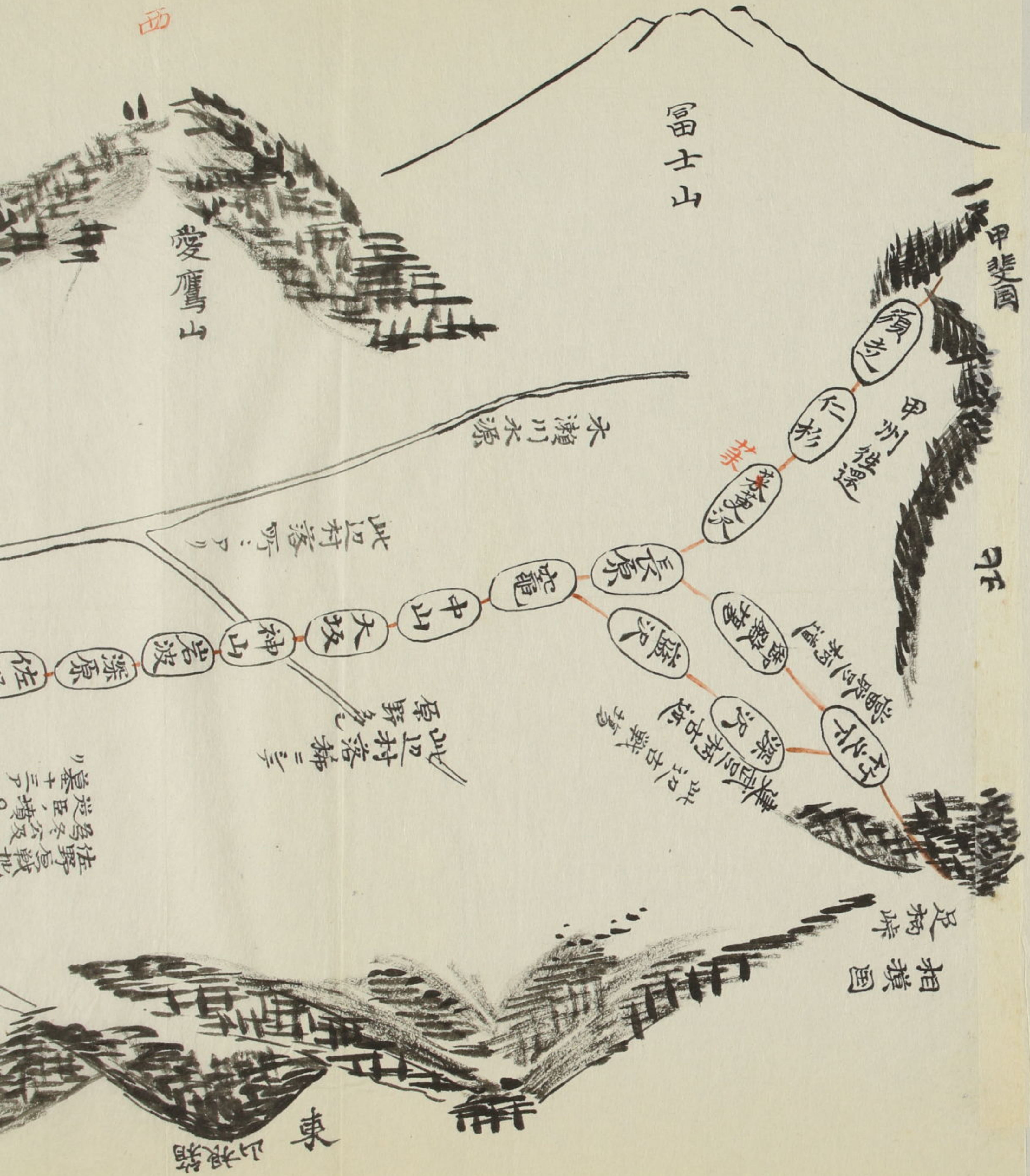
一祭神二條左中將為冬卿

一由緒建武二年皇利尊氏討ノ節官軍難
戰ノ際二年皇利尊氏討ノ節官軍難
ヲ理メテ墳墓ヲ築キ舊未崇敬累年祭

一本社間口梁間二間桁行一間半但建築費
折行二服部三大尺但前全候

一拜殿四月十二日十二月十二日每年兩度
仕祭典費八服部大八自費ヲ以テ執行

一祭日仕祭典費八服部大八自費ヲ以テ執行



一境内
 坪數三百六十一
 番内六十八
 田八畝
 八
 但元地券二百二
 有地改坪三處永
 地有之候
 鄉社祠掌ヲ以テ
 今候
 一神官
 兼務神官願度候
 一氏子
 二十五戸
 一社管轄ノ廳ヲ距離十七里三十四丁
 右之通相違無御座候也
 明治九年四月廿四日
 右村
 服部大八
 静岳縣令大迫貞清殿

甲斐國

下

相模國
足柄味

富士山

愛鷹山

東
山根箱

竹ノ下戰場ヨリ
佐野原戰場マテ
七里佐野原ヨリ
三島宿マテ一里半
沼津宿ハ三里

大本松原
水代田跡

賴朝義経
對面古跡
千ノ樋

水瀨川水源

此辺村落所ニ

此辺村落ニ
原野多ク

佐野原戰場
為冬及
逆臣ノ境
墓十三ヶ所

皇馬田
皇馬田
皇馬田

小田原
草原
總倉

南

東海道

沼津

白土

水瀨川

水瀨川

水瀨川

水瀨川

水瀨川

野宿

野宿

野宿

野宿

野宿

野宿

野宿

野宿

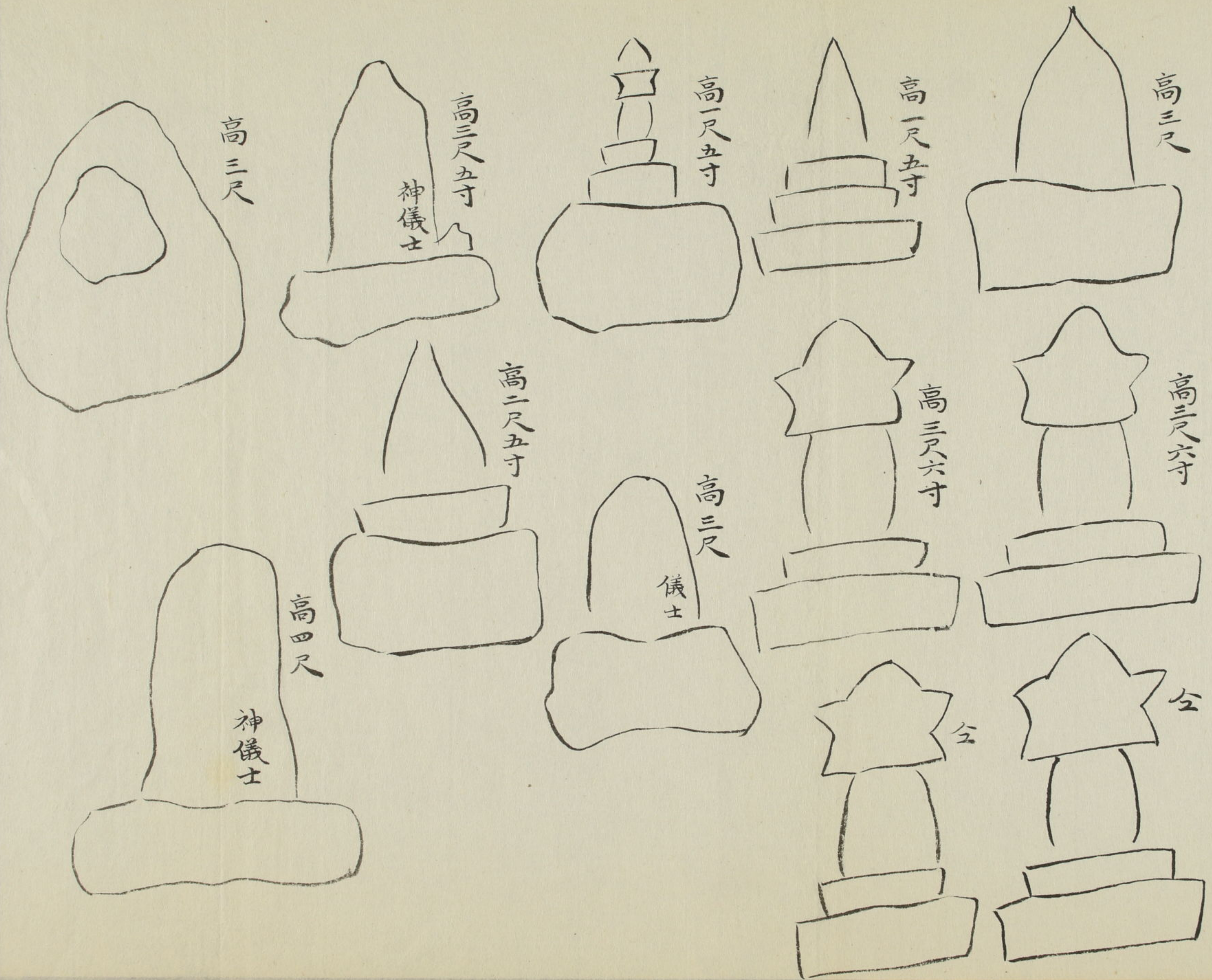
野宿

野宿

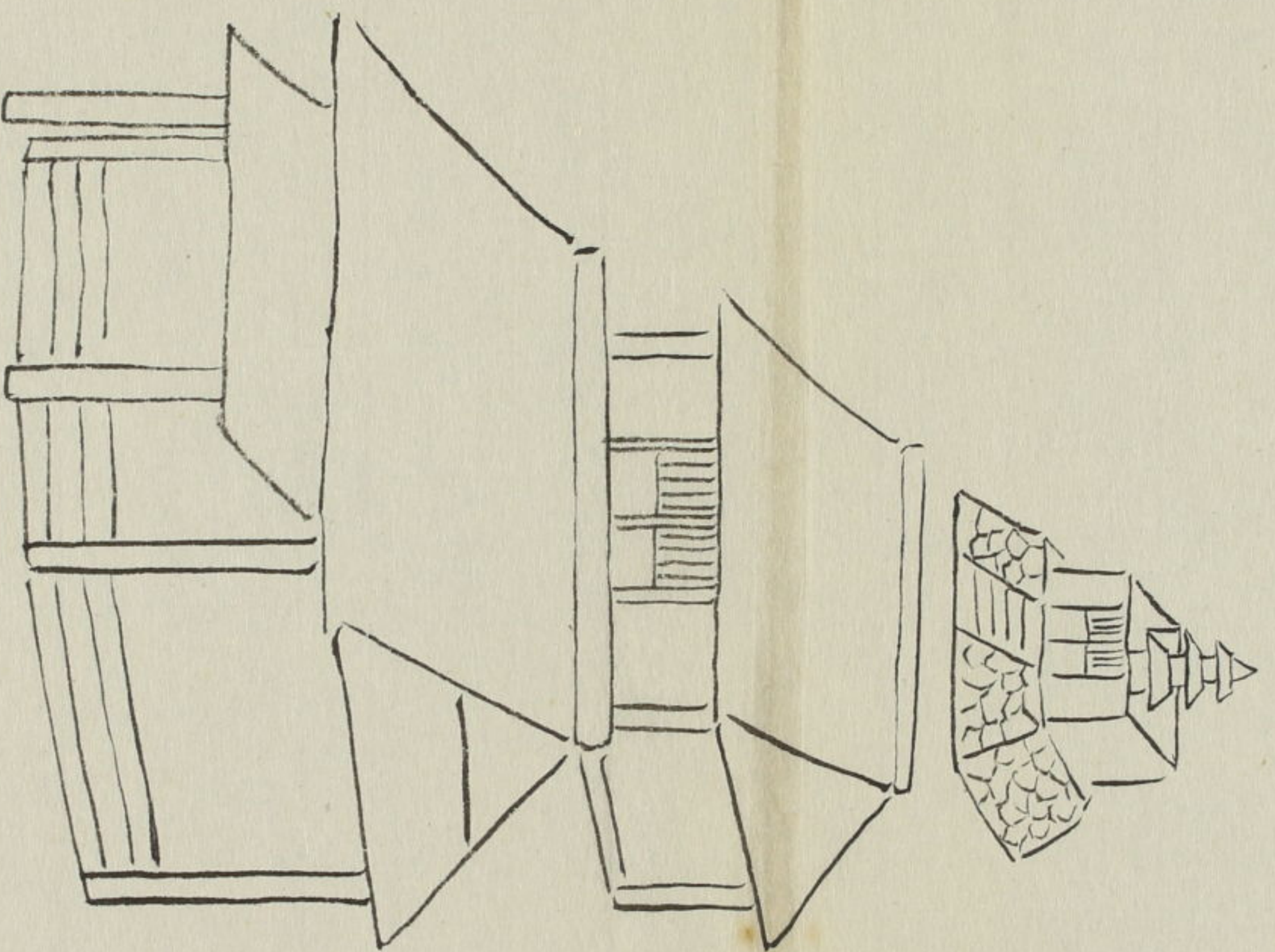
野宿

野宿

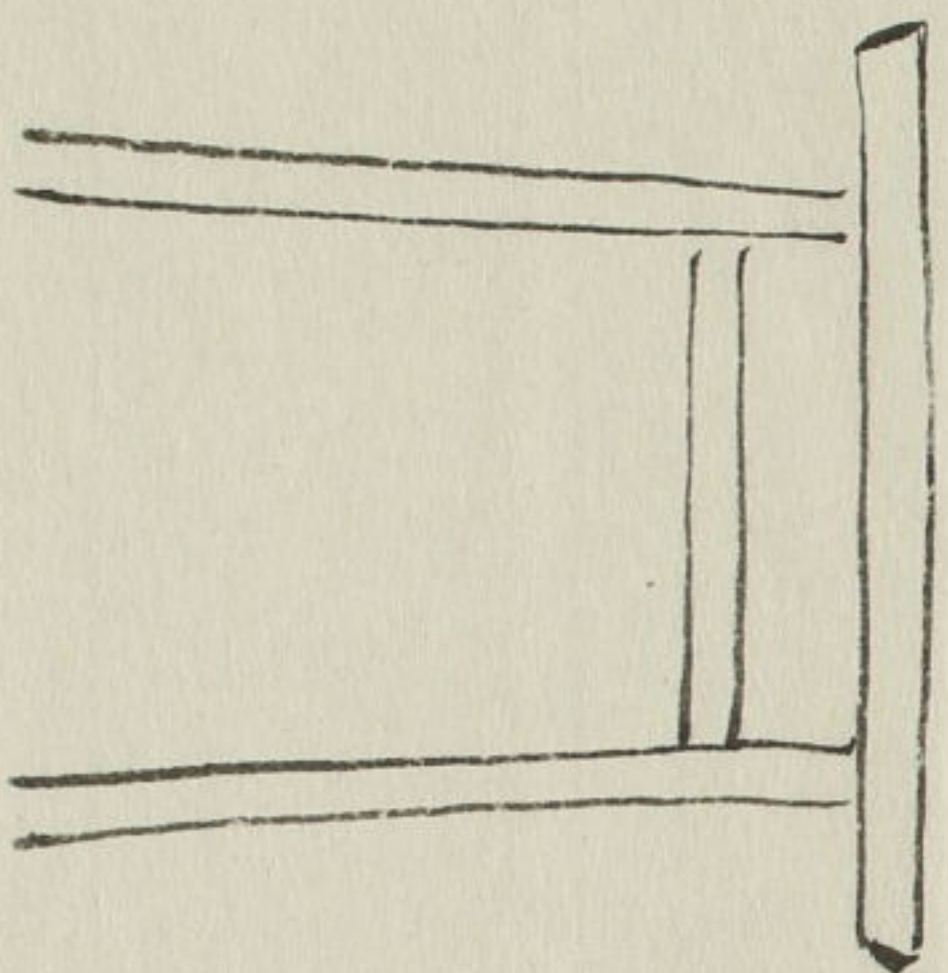
中將為冬公從臣墳墓十二略圖



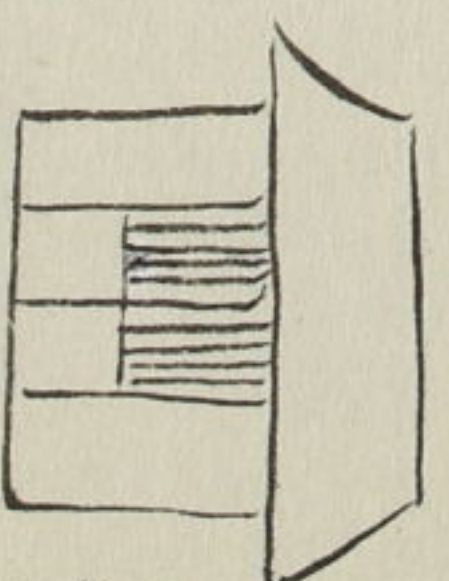
明治九年許可
新築佐野原神社
略圖



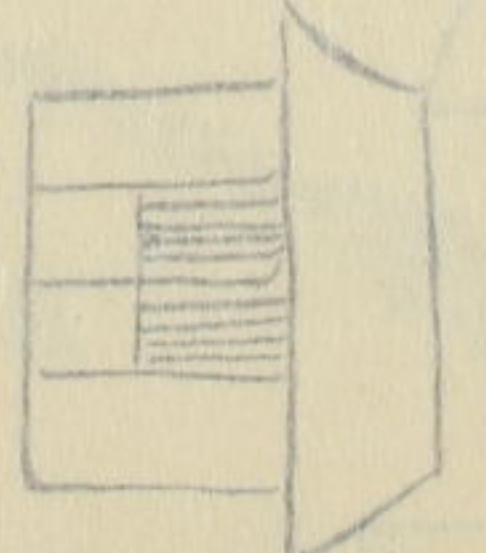
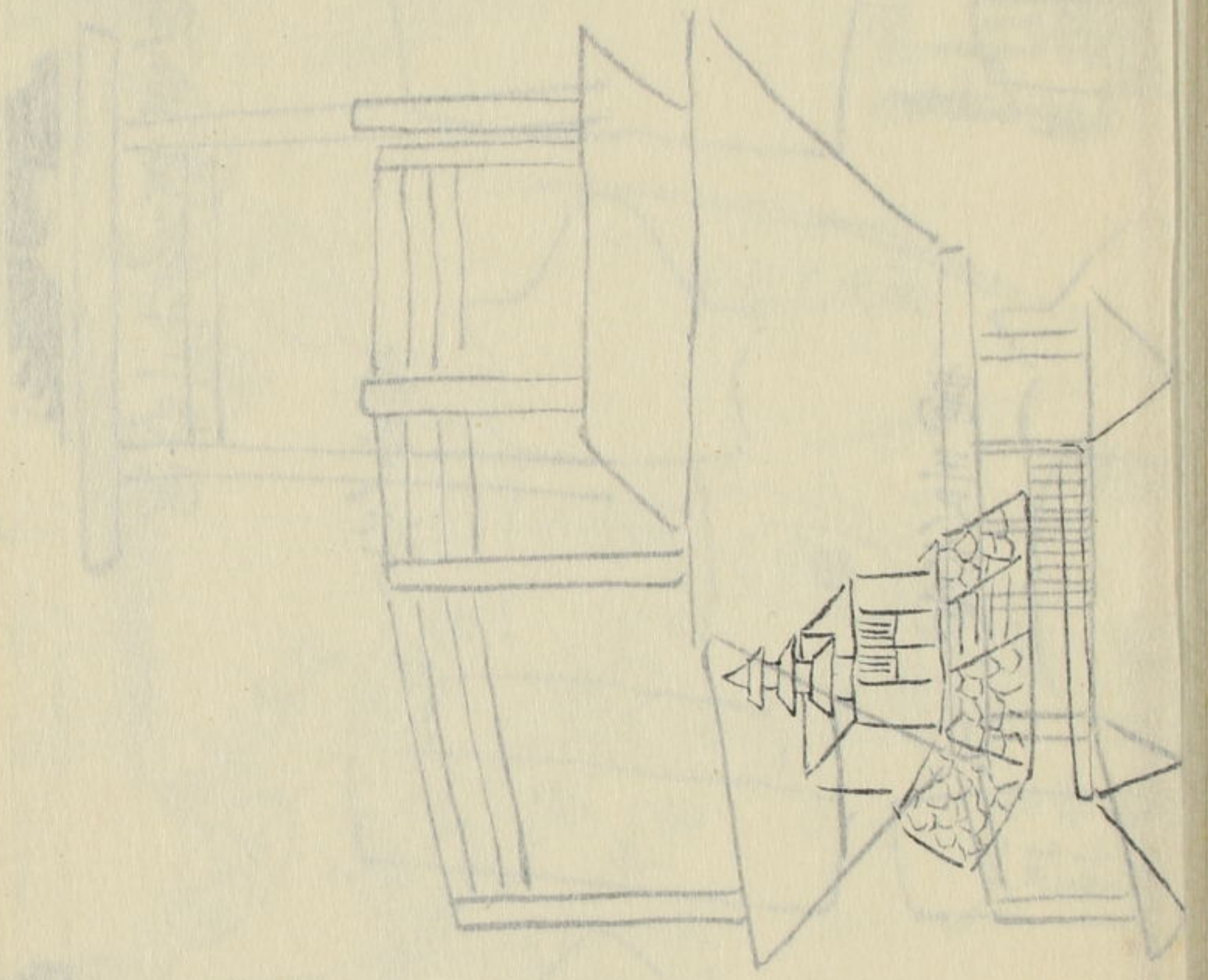
碑文建築地
谷中將撰文



明治十年之役駿東郡徵兵
戦死者ノタメ服部大八如立
社
招



谷中將標
碑文建築



社意拾

如圖
地界
此石
此石
此石
此石

明治十年之役駿東郡
織者之衣服部大和古

佐野為神社

今般

思召ヲ以テ白鞘御短刀銘備前壹口祭祀料金五

拾圓下賜候事

明治十五年七月三十一日

宮内省

此他有諸家寄附品目錄及奉納詩歌今畧之
 明治十六年十二月十一日夜寫于燈下
 此日公戰沒忌目前一日也不覺愁淚落

帝上

半田誠

一話一言卷三 四十五丁

駿府碑

わらさほいしやう

一話一言卷三 四十五丁 日駿府御城二の丸小高七尺板の石
碑ありその石の竹ありと衛士某の話をり

甲州山梨郡磬銘

紹興貳拾捌年四月十日經明州都稅務收稅刊字
訖合於丙申淳熙參年拾貳月拾五日重新才造
置童祖顏祖義與合山童行等謹題

甲州巡見通行記

甲斐岩窪村大泉寺武田信玄碑

法性院大僧正機山信玄公大居士神儀。天正
元癸酉四月十二日病。右三年之間隱密諸方
敵國也。乙亥年四月十二日。於此處有御訪。

武田機山公墓表

法性院大僧正機山信玄之墓

碑陰

公姓漁名晴信。武田其氏也。頃壯下髮。稱機山信玄。天正元年癸酉四月十二日薨。權葬三年乙亥四月。火浴于此地。以分骨云。今茲己亥春。董民某等戮力新造碑。盖倣羊祜之墮淚碑。聊伸景仰之誠也。一日掘地。得灰與骨。然則其衣薪之跡明矣。古碑曰。三年不發哀。為有歎。固其文雖不完。今又藏壙中。請後人微之。

安永八年龍集屠維大淵猷孟夏上浣日任瑞巖山
院圓光禪師嗣祖沙門凱愚應謹誌

行雲樓遺稿卷上十三

題武田機山碑後

松島北渚名垣

峽中野人耘得碑題曰法性院機山大居士神像有
客打碑齋跡我文字漫漶豈可知展未憶起公雄略
舉旗為正偃為奇白旄所麾更無敵整旅殆將入京
師聞訖碑下見石棺野人欲葜骨頰痿英雄骸髓既
雖朽厲氣尚怒匹夫窺野史矣傳沈湖夏公多罪惡
懼鞭笞嗚呼公之英靈凜如在匹夫何得近其屍

甲斐叢記三 九ノ

地鎮銘

齋藤正辰

甲州蓬澤西高橋兩村受濁河剩水而大半作沼、數
十年隣近七邑亦同兩村為甚、天雨則非船不可行、
民荷擔而立、河魚之疾、與溺死俱焉、禾黍不實、餓莩
盈野、將為不毛之地、元祿甲戌、櫻井孫兵衛治政、能
為郡、到于邑、民庶涕泣、請濬治之、計政能諾、明年乙
亥、歸懇老臣、其事甚勤、因君恤之、明年丙子、新命政

明治十年正月廿日寫

能檢地鳩功自西高橋至落合村堤凡二十一百餘
間開淤決塞濁河導流遂合苗吹川而止於是土地
沃燥稼穡蕃燕民可以居祖可以入政能之死久而
兩村之民愈不能忘乃奉政能為地鎮建祠每歲祀
之嗚乎生益於人則死祀之古之典也余恐後來失
其所由遂書勒石云尔元文戊午七月

古序碑銘類集卷一

甲斐國酒折祠碑

山縣昌貞

日本武尊既平東夷還次甲斐國酒折宮此為
其舊址有祠享祀不解者千六百有餘年于今
矣昌貞等不勝景仰之至樹石廟庭謹為之銘
嗚呼尊之靈德千載之下八埏之外靡不被
其化焉若夫底績之著則史籍歷然此不復序
銘曰維神開國皇舉其綱要荒未服逞其強
梁偉哉帝子是民之望爰提神劍經營四方
梟帥授首蝦夷來王威德所及莫不被攘愷旋
作詠新墾之章鏗鏘遺響千載流芳元文元武

鈴屋集六 三少

甲斐國酒折宮壽詞

那麻余美乃甲斐國之此酒折宮者母與纏向之日
 代宮尔御宇斯天皇命之大御代尔倭男具那倭建
 男天下之益荒建男神建男登皇子之随所選賜互
 千引岩之重伎難伎大命乎重浪之頻蒙斯互西國
 能無禮熊曾乎言向賜比東國之荒振蝦夷乎和賜
 互神登母神登宇都曾美乃丑尔比無伎建伎由由
 斯伎大御稜威之天下尔萬代尔天津日登照耀加
 須字豆能大御子倭男具那倭建神之命之事訖互

驚

オホコトヲヘテ。アキツシマヤマトノクニニカハリマストキコロモテノヒタナラヌキ。
大夏竟互。蜻蛉島倭国尔。還坐時。衣手能常陸乎過。
良氣年登過。理坐流其道之。其行宮登神隨逗坐互。
後丑迹。片歌之。統歌之。夏之。始登仰那流。新治筑波。
乃大御歌乎。読斯賜幣流其宮。所蹟慶登百。継十嗣。
御世者。移礼。孺十年。五百歳。年者。経奴礼孺。余吕志。
那倍宮者。宇勢。世受。跡者。絶不為。今行前母。比佐迦。
多能天津日登。天津日嗣。登倭男具那倭建神命之。
無比伎建。御稜威乃大御名登。共共迹。諸共尔。長良。
閉互傳波理互。萬代尔。常登波尔。弥高迹。弥廣尔。照。

ユカムサカエユカム。ミヤトコロアトコロ。
将去栄往牟。宮慶蹟慶。
寛政之三年云歳之正月。伊勢国飯高郡之御民。
平河曾美宣長畏畏母寿白。

氣吹舎文集二 才 北 四

酒折宮碑文のそとふみ 平田大壑

此之大宮乃前神主、飯田正房主者毛、已登於耶自
鈴屋宇斯乃教子尔、氏大人之手、豆加良、小伎紙尔
書給比斯、此壽詞乎、賜波里氏、伊賀傳石文尔、彫立
氏牟登志斯、氏波在都礼、行毛、容易加良、努攀那礼
婆其、夏果佐傳那牟、在祁流乎、今度其子正廣主、其
志乎、紹氏思立、努流乎、名取忠貞、名取茂樹、太田寛
亦、江戸人那賀良、今斯同所尔、住苗、奈井長、丑那、行
云、人人麻米尔、夏謀里、助祁氏、如此那毛、巖伎碑尔

立流尔就氏此石尔宣波志久已尔書氏登請遣佐
礼多流尔常石尔傳波里行年此人人之有功乎感
宇牟加斯武餘里世尔署伎已我文手之拙伎乎毛
思波傳如此那牟

天保之十年云歲之十一月

重修延山道碑

龜田綾瀨

信陽八嶽之下。延山之間。行路偏仄。崎嶇谷窈而溪
深。石峭而水駛。郵亭村落。皆枕險而居。其間平原曠
野。後先相屬。深箬荒茅塞焉。猛獸毒蛇。宅焉。樵蘇有
時。乎往而不復。昔者武田法性公之伐信濃也。裹糧
束兵。披巉巖。攀懸崖。直入信濃。衆駭詫以為神兵。從
天而降焉。自天整一闢。商旅始行。輪蹄漸通。然冬春
之交。積雪埋谷。則一望皓然。無際勁風。作威層冰。舞
空。行旅裂膚破面。人馬俱仆。而墜不測者。不可勝數
也。嶋崎德次郎。平澤驛人也。天資篤實。樂善不倦。常

架橋梁。修道路。苟有裨於國。有益於人者。必盡心致力而為之。嘗慨然而病。身賤力微。不能夷延山之險。而反之坦途。於是勤儉自勵。稍致餘裕。乃與同志者相議。戮力損貲。鳩材募工。將起其役焉。時文政三年庚辰秋八月也。都稅使川崎君召德次郎於御影之官廨。改命督率其事焉。於是芟穢艸。斬惡木。挾土石。疏汚流。偏仄之蹊。則植石而為行旅。冬月雪行之表焉。險者始夷。塞者始通。馬牛奔坦途。行旅誦其功。八年乙酉。都稅使荒井君上疏白之於官。官特嘉其功焉。賜白銀而旌之。此役也。德次郎積年精誠之

所致。而其所以有裨於國。有益於人者。亦大矣哉。小官山正安乞余文勒之於石。三叩吾廬而不辭也。因紀所聞而著之。云。甲午夏四月。

伊豆修善寺源賴家公墓

元久二年

心夷大將軍左源賴家公尊靈

甲午七月十八日

余今夏飯省、途次伊豆、遊修善寺、於此墓ヲ觀ルニ、
民家ノ左ノ山上ニアリ、墓前ニ缺製ノ小サキ鳥井數多ク奉
納有之、墓前ノ石壇十六級、其側ニ石燈籠一雙アリ、
天明二壬寅八月吉日トアリ、

此他蒲冠者範賴ノ墓アリ、民家ヲ離シテ二町餘山ニ登レバ、

右ノ方ノ山ニ沿ヒタル麥田中ニアリ、最小ナル石ノ祠ニテ中ニ没
字ノ小石タテリ、鳥居ノ左邊ニ石碑タテリ、蒲侯碑ノ三字篆
額アリ、紀元二千五百四十年歲次庚辰第二月岩城魁撰文
野田保謹書石工司今井好治ト署名アリ、寄附金人名ヲモ
刻ス碑文ヲ写サント思ヒシカニ、薄暮ニ及ヒシニエ写サズ惜イカナ
侯ノ字一畫誤レリ、逆旅ニ入テ、岩城トハ如何ナル人ブト主人ニ
問ヘバコハ先年此地ノ学校教員ニテ在シト答ヘテリ

伊豆江間村巨徳山北條寺後山石塔二個

其一

北條寺殿觀海大禪定門

左側

北條相摸守從四位下江間小太郎平義時

其二

松月院殿太虚清心大禪定門

左側

佐伯伊賀守藤原朝光娘

不忍文庫金銘類

伊豆加茂郡松崎郷渭濱村普照
寺鰯口銘

敬白普照寺御寶前奉施入金鼓一口
大工沙弥妙心元應二年庚申六月十
七日右意趣者為身中所願成就圓滿
也勸進大中臣友綱

走湯山東明寺鐘銘并序

謂之下
宮鐘銘

南部州葦魚飽津島東海道豆州走湯山有神塙之
 廟壇有佛閣之梵宇權現之施外用也一陰一陽薩
 埵之影內證也千手千眼謂垂跡之草創應神天皇
 聖代靈鏡出海思濟生之根元仁德天皇明武瑞湯
 現流凡厥奇特敢區逞彈越鎮坐以降運轉幾曆數
 遐迹不限感應是日新而文保着雍年玄律十一月
 樹提示薩華構文基是以使政成風之殊功將祿締
 雲之奮製先鑄銅鐘倫焉宣覃法音於無邊際普致
 勝利於一切衆仍作銘曰

跋

金之為器，鐘有發聲，宮商迤變，律呂俱并，鳧氏功顯，
鵠王聽驚，形模異獸，韻撞巨鯨，隨嵐幽咽，待霜和鳴，
達三十界，告四五更，普令諸衆，悉地各成，乃至羣類，
罪根不萌，縱歷億劫，縱累多生，梵響無斷，法宇無傾，
元德三年二月日

執筆上：執夏樞大僧都弘意

和泉

大工相州森庄一色村樞守常盛

當時下所樞大僧都乘賢

當時上所樞大僧都善忠

五題上 明德三年壬申五月廿六日書之

余客歲飯省之次，枉途於伊豆山間，鐘所在，土人云
祠前嘗有鐘三口，中與之初，因有神仙不可混之令，
鎔毀古鐘二口，唯存新鐘一口，供村民非常之用耳，
嗚呼！村民無心于保護古物，豈不惜哉！

明治十六年九月廿四日午後寫畢而書

尚古齋主人

遊豆小志

松崎悌堂

東行三里謁伊豆下祠祠距上祠磴道五百餘級
古殿荒廢罕過而訪之者洪鐘一簾鑄於明德中
銘字古拙略有致是山舊物唯是苟完云々

相州鎌倉寶窟淨智禪寺鐘銘

謂之上
宮鐘銘

寺舊樓鐘聲弗大揚者久之住山天外志高禪師謀
於檀門施財之外復謂藉衆緣益奇僧倍見聞樂助
乃命工僮範摸一鐘就功請銘於圓覺比丘清拙正
澄喜而贊曰昔梁武帝因寶誌禪師之言詔天下寺
擊鐘當舒徐其聲俾地獄閉而息苦然則鐘之功大
矣哉予宜為銘曰

惟茲巨鑪厥功在音彌令晨昏禮樂山林下徹空林
上窮有頂停酸息苦警夢寤省閉齋捧鉢出定舒容
得句狂扣悟禪衣春音唯一躰機乃萬應其例則同

例經用

明治十八年六月初二抄

永
各證所證如來尔一音演揚隨類得解成契真常
又如天鼓普告天衆声出自然十方聳動倚欵禪師
淨智妙圓以鐘說法密暢遐宣情与無情同塵清淨
声未耳往返我閉性皇風浩蕩佛日昭明兵戈永息
國界隆平梵刹崛興檀門光大保我闕東億千萬代
大歲壬申正慶元年解制前一日

小奉行窪田秀重

丘

幹縁比丘此下有名字
知事比丘
頭首比丘

當代比丘天外

本寺大檀那菩薩戒弟子慧清
大檀那前相摸守菩薩戒弟子崇鑑

匠氏山城權守物部信光
匠氏大和權守物部光連

皇帝萬萬歲

大日本國豆州走湯山東明寺洪鐘一口御寄進
大檀那主君公武林梁大祖從四位左京大夫平
氏康

奉行

笠魚美作守藤魚綱信

遠山甲斐守藤魚綱景

太田越前守三善宗真

上執事權大僧都真栄

當修造奉行權大僧都法印真譽

大德真惠 長弘

木食權大僧都法印源惠

天文十九年庚戌五月十八日

大工秀吉

豆州熱海地志

東明寺鐘丁北條氏康鬪戰之取為軍用之備難速
得銅鍊故鑄此巨鐘以充鳥銃之具故天文十九年
氏康用鎌倉淨智寺鐘送此寺今所鑿簷者是也淨
智寺鐘高五尺五分口廣三尺五寸五分正慶元年
平高時之所鑄也清拙撰銘

熱海温泉図彙 北一丁才

伊豆権現

アタミノ北十八町小田原へ至ル道ノ側ニ鳥井アリ、走湯山東明
寺ト云別當ヲ般若院ト云フ十二坊アリ昔ハ今ヨリモ廣大
ナリシ大社ナルコトハ東鑑ニ詳ナリ拾遺扶木松葉哥枕名寄
等ニ古哥ヲ載タル舊迹ニミテ、神灵アラタナルコトハ普ク人ノ
知ル所ナリ

古井ノ杜

伊豆権現ノ西北ニアリ古哥ノ舊迹ナリ

遊豆小志

四丁方

松崎懋堂

一里伊豆山祠祠分上下官道貫其間公子步謁
上祠石磴百餘級茅屋十餘楹環以公欄竹栢二
三十圍鬱然祠南相傳松葉仙人祠莫能詳左右
二祠曰弥陀佛曰僧空海喬木千章環抱其外徘徊
俛仰殆使人發遺世之想源二位之放于豆也
私禱焉後起握天下兵馬以為神授也土木鬱奧
金碧交輝香火之盛為世稱首星霜六百兵燹之

餘亦建久之奮，無一存者，而二位之澤亦僅二世而斬。夫神者能福于暫而不保于久，邪能福于人而不自存，邪將禍福之未任人自取，而廟宇之隆替或不自主也。然而冥者苟偷富貴，以為媚神所致悲夫。下略

又十三夕

六日晴，同十束隆主詣伊豆上祠，捐鐘銘。是鐘正慶紀元鑄于鎌倉淨智寺，住持志高募緣。北條高

取捨財，圓覺正澄作銘，字刻甚精，文亦鏤中錚者。天文中北條氏康奪而故之上祠，遂刊去淨智寺志高等名，別刻本祠名號。及已爵稱主夏者，官銜數十字，刀筆粗惡，非特白璧微瑕也。下略

不忍文庫金石銘類

伊豆弦卷山光明寺鰯口銘

豆州絃卷山光明寺鰯口慶長十八年
七月二日大工齋藤右近駿州太平鄉
助右衛門大本鏡吉秋

明治十年六月初三抄

豆州熱海鄉和田村海岸山興禪寺鐘銘

夫以當山中興竺漁老翁讓余於文室卜隱於寺傍
嘗憂寺無樂器因之大檀那藤堂高次公公歡喜點
頭即施黃金數十兩仍鑄巨鐘一口掛之簷矣今也
余寓樓州北勝雄山中遠介余小子泰上坐請銘銘

接

曰

能銷得信施金錢一箇華鯨鑄出全月下琅：鳴海
岫風前隱：響溫泉春閑花外秋楓外早促參禪晚
坐禪喚覺衆生煩惱聲：都徹世三天泰上坐撞
一撞云劫石有消日洪音無盡年

寛永十癸酉年小春良辰

明治十六年九月廿四日

熱海温泉図彙 セードウ

興禪寺

和田村ニアリ、中興開山万里小路中納言藤房入道授翁大和尚寛永年中雲居慈光不昧禪師住職鐘ノ銘前文略之寛永十癸酉年小春良辰大檀那勢伊兩國太守藤大覺寮朝臣高次公治工三島居住齋藤右近尉正俊前妙心雲居叟希膺誌トアリ、熱海ノ里人某ノ誌ニ雲居国師此寺ニ住職アリシ由来ハ国師奥州杵島ノ瑞岩寺ニ住職アリシ片心ニ欲セサル更アリテ瑞岩寺ヲ逐電シ名ヲ隱シテ行脚シ此地ニ入湯シテ興禪寺ニ寄食シ賤シキ勤メヲナシテ居ラレ一日門前ニ出テ草ヲトリ

テ居タリシニ国師ノ弟子二人イッレモ一寺ノ住職ナレハ保養ノ
タメ此地ニ入湯シ勝景ヲ尋ントテ奥禅寺ノ門前ヲ過リ国師
ヲ見テ大ニオドロキ忽地上ニ蹲居テ国師ノ名ヲ呼ビコニ未錫
ノ所以ヲタツ子ケルニ此片奥禅寺ノ住持門ニツラナリシ石垣ノ上
ニアリテ之ヲ見オロシ行脚ノ僧ト云ヒシハ雲居禅師ニテアリ云
カト大ニ驚キ直様本堂ノ壁ニ詩ヲ題シテ住職ヲ雲居国師
ニ譲リ裏門ヨリ出テ行方知レスナリシト云ク此僧モマタ凡ナラス
後ニ温泉寺ノ蔵本雲居国師年譜ヲ見ルニ此支ヲ記シテ詳
ナリ

伊豆州熱海湯前神祠之碑銘并序

信陽漁通魏撰文

伊豆賀茂郡葛見郷湯泉涌出下流注海因
名熱海云相傳天平勝寶元年己丑正月少
童彦名神憑章曰浴於此者沈痾必愈果如其
言後人建祠禋祀不懈殆千有餘歲至慶長
中神祖即浴焉寬永十一年猷廟亦將浴之
會構行啟遺趾及調馬場尚存焉其泉出自
巖穴熱可燖燖涌有期刻晝夜凡六迨期澎
湃洶涌勢如鯨沫噴天聲如雷霆振地煙霧

晦冥飛流迸散不可鄉迹矣。一涌一止未嘗
差也。吾大東名溫泉未聞其有如此。故王公
士庶越國浮槎。麇至浴焉。烏厚雉兔之地為
靈區。豈非神使然邪。乃作銘。銘曰。
靈祇之造。于思厥初。沐浴神瀆。沈痼滌除。

武藏平鱗書并篆額

明和庚寅秋九月 熱海石渡親由 建

明治十五年十月廿六日

熱海溫泉圖彙 六下ウ

熱海溫泉未由

上略我朝溫泉ニ治シテ疾ヲ瘥治スルコト少彦名余ヲ以テ推輿トス抑
熱海ノ溫泉ハ人王二十五代仁賢天皇ノ御宇ニ當リテ此所ノ海上
ニ溫泉忽然ト湧沸テ烟氣海中ニ立昇リ熱湯ニ觸テ爛レ死シタ
ル魚ノ類岸ニ次ヨセテ惡臭堪スシテ人跡コレガ為ニ絶タリ星霜
ヲ經テ人王三十九代天智天皇ノ天平宝字ノ頃菅根山ニ高徒ノ沙
門アリ日ニニ方廣經ヲヨムコト万巻ニイタル故ニ人呼テ万巻上人ト
イフ一年常陸鹿島明神ヘ參詣ノ故ルサ熱海ノ海上ヲ見渡シ
タルニ浪ノウチヨリ烟立昇リ火焰ヲ出シ諸ノ魚焦死スルコト大

焦熱ノ地獄ニ異ナラス上人コレヲ見テ憫ミ玉ヒ暫佇立テ経ヲヨミ
念仏ヲ唱ヘ玉ヒシニイツクヨリカ白髪ノ翁来リテ上人ニ向ヒ見玉フ
如ク此海中ニ温泉アリテ熱湯ヲ吹出シテ魚類ヲ焦殺スモト
吾ッ子ニ之ヲ憫ムシカノミナラス人ノ萬病ヲ治スル不思議ノ靈湯
ヲ海中ニアラシムルハ玉ヲ淵ニ沈メオクヒトシ何トゾ弘法ノ功カラ
以テ上人コレヲ祈リ此靈湯ヲ山里ニウツシ給ハ魚類ハ死ヲ免
カレ人民ハ病ヲ助シト其功徳究万歳ニ傳フベシト云畢リテ其
形見エスナリ又上人思ヘラクコレ凡人ニアラス薬師如来ノ告ナラ
ント齋戒沐浴シ海岬ノ洞ニ入り断食シテ禱ルコト三七日満願
ノ夜ウシノ山ニ鳴動シ海上ノ波涛逆卷キテ其音百千ノ雷ノ

如ク暫シテ海中山上穩ニ成リケレバ上人岩窟ヲ出テアタリヲ
見玉フニウシノナル山ノ麓ニ雲ノ如ク立昇ルモノアリ上人怪ミツク
其所ニ至リテ見玉フニ山崩レテ石ヲアラハシ石ノ間ヨリ熱湯沸
出ルアリサマ神竜口ヲ開キテ水ヲ吐クカ如シサテハ我カ念カノ
満願シテ海中ノ温泉コニ移リシナラント上人此所ニ止リテ薬
師如来ヲ祈念シ此温泉ニ功能アラシメテ万民ノ痛苦ヲ助ケ
玉ヘト祈ルコト一七日シテ立去リ玉ヒ又今ニ至リテ熱海ノ里人
ノ大湯ト唱フルハコレナリ天平宝字ヨリ今文政十三年ニ至リ
テ凡十百余年ノ昔ヨリ一日モ湯ノ湧ノ絶ルコト無キハ実ニ神
変不可思議ノ灵泉ナリ(此説里人ノ口碑ニ傳フ百樹別ニ考

アト姑ウ里説ニシタカフ

熱海温泉図彙 ナセ丁ウ

湯前神社

上町ヨリ一町余西ニアリ、祭ル所少彦名命、鳥居ノ側ニ碑
アリ、明和七年社人ノ建ル所ナリ、文ハ信陽漁通魏晉ハ東
江平漁鱗カ千百余字ツラ子湯泉ノ起立ヲ記シテ、天保勝
宝元年己丑正月少名彦神憑童曰トイフ文アリ、又慶長中
□祖ノコニ浴シ給ヒシコト、寛永十六年猷庵尔將ニ浴シ給ハ
ントテ命シテ行殿ヲカマヘ玉フ遺迹及ヒ調馬埒尚存ノ文アリ、
石燈籠兩基、宝曆八年夏久留米ノ太守コニ浴シ玉ヒシ取ノ御
寄附ナルコト彫ツケアリ、石鳥井、安永九年、妹太守二度浴シ

玉_ヒ中、御寄附ナリ、毎年九月十日ニ祭礼アリ云々

遊豆小志

六丁才

松崎惺堂

遂謁湯前祠、祠在湯池西北、有碑、都人源通魏撰、文甚簡、石華表一置、久苗米少、將建通魏市隱社、中巨擘、予入社、晚不及知也、云々

默翁朝川先生碑銘 龜田鵬齋

士 江戸醫師朝川默翁。客死于豆州熱海。其子
五昂狀其父實。乞銘於余。余雖不與翁相
識。與五昂已同臭味焉。於是為之銘。翁諱信
字子順。姓朝川氏。本姓平井氏。默翁其號也。
仕於廣嶋侯翁。有故。遜於弟而逃。去之都
下。設帳教授生徒。業頗行。賈人備喜者。每侍
講。遂請教焉。一日謂翁曰。吾聞之古人。興衰
於無用之地。施德於不報之所。故魯仲連為
取人排難解紛。而無所於人。李士謙賑施為務。

明治十八年六月初二抄

而惡陰德之稱入于耳。吾視當今儒林皆空
文虛名。不過希世饕利耳。用其心於濟世為
人之實功者。絕無之矣。真可痛哉。其言如激
勵翁者。翁慨然有所憤起。遂絕奔名利之念。
變名業醫。轉遊四方。所到鬻藥取精。而前嘗
慕獨嘯菴之為人。東西浪遊。五六年而再歸
江戶。改名順得。又稱母姓。而改今氏。理瘡滋
精。一七起死。居無幾何。家累千金。然躬厲節
儉。深戒奢侈。每以賑人。澤物為己任。是以或
數至空匱。猶晏如不憂也。嘗欲捐財以翻刻

精

十三經注疏。魯論孝經。既成。有故而不果。功
其濟世為人之厚。志顯然。世人不及見者。如
此。或有因負逋犯罪者。翁傾筐而購其死。或
有被災耗產者。倒囊而助之。再振業焉。是類
尤夥。而潛保佑之。緘口匿名。如不出己手者。
其救急扶危之陰功。黯然而他人不及知者。如
此。翁遊中國。時適于赤穗。宿於高田村里。正
某家。以其父嘗給仕于大石良雄。葢良雄所
親。寫達磨像一幀。被權貴奪。深以為憂。翁歸
路過于濃州。得見其幀。乃出金購求。盛郵筒

以贈之于其家而不明已名厚施不食報者
皆是類也。翁性沈默寡言。有簡貴之風。其才
頗長於經濟。或自號馬牛翁。雖曰取諸莊周
言。其意蓋在於負重致遠不厭其勞也。察政
勢所急。民瘼所係。弊所宜革。利所宜起者。審
條疏之。并述其屬置竊。因所知之。主管有司
以達諸有力當夏之人。或有一二被聽用。民
陰受其賜者。云。夏詳于行狀。今不載于此。翁
踐濟世為人之實功者。其出天性。又奚疑焉。
然翁常謂吾賴彼。備喜之激切。而興其志矣。

其謙虛讓入者亦如此。翁耽於浪遊。足跡遍
于四方。常謂曰。我死。葬于山水秀偉之地。文
化十一年甲戌之春。患噎。至秋。漸加。知其
不愈。輿病如熱海。而坐湯焉。居僅數日。溘然
逝矣。暇八月廿八日也。享年六十一。乃窆于
其地。翁妻原氏。原片山。魚山先生之配也。先
生沒。已有娠焉。并携先生所生女。名壽美。男名
道昌。改嫁于翁。遺腹子。名曰鼎。重奉二女。翁
視蕙山先生之子。與己子等。親踈經史。督責
尤嚴。撫育鞠養。終始如一。壽美嫁福山氏。道

昌贅于長山氏翁所生適女嫁井筵氏次女
尚幼昂字五昂號善庵年甫十二翁託之於
北山先生親受業焉今現為都下名儒矣翁
如熱海前一日召五昂姊謂之曰昂非我血
胤乃汝父遺腹之孤也今昂學既成足紹箕
裘以與其家焉我三十年教誨之勞皆止為
此耳彼復本姓勿墜其傳吾死無憾矣姊以
其言告五昂五昂愕然失色如始知翁非本
生父者乃謂姊曰昂自墮於地生長膝下未
知別有父也晨夕之慙勞夏冬之冷熱真昊

涯
天罔極奉養難酬其深恩雖所生又何及焉
其續業則昂謹奉命如復姓昂不敢也翁感
其言不復強之丁卯歲翁年五十四翻然自
謂曰吾以天幸萃福享於一身以優畢志願
之所欲為者矣夫人生無固神力有限何得
不暢吾性之所樂而養其老耶於是所假貸
三千餘金皆焚券不責償又二十年來所聚
書畫寶器之類益出以鬻之輒償負連施親
族而悉散之其春遂携妻而謁俊遊焉其胸
襟開拓亦如此其冬十二月歸江戶買宅於

葛陂謝絕交友。不復謀衣食。然其意以為人
之在乎世也。苟有一日之生。則當成一日之
功。何為頑石枯株。同歸於無用邪。再出都下。
鬻藥聊生。更稱賣藥翁。公卿大夫。雖延聘請
診。不復踵其門。惟閭巷草野之人。請治。則雖
風雨。夤夜必行。至病劇絕粒之日。劑藥診脉。
猶必親之。其精神爽健。如無病人。云熱海之
地。山秀海濶。溫泉沸湧。涵雲注玉。乃安靈柩
于此。翁之魂魄。舍此安歸。五鼎立石。鑄之。嗚
呼痛哉。銘曰。術非為利。躋壽為心。功非為名。

方

救窮為任。給躬也薄。邨人也深。仁不於陽。德
皆在陰。陰德有報。報以厥類。厥類維何。五鼎
不翊。翁教以法。鼎奉以義。襲姓與業。孰曰無
嗣。文化十二年。歲在乙亥。春正月。江戸龜田興
撰。常陸大窪行書。從五位下河內守增山選
題。額孝子鼎立。廣群鶴刻。

熱海温泉碑

羅多保津斗安有留古津之英國美仁須登留

予奉國命。寓日本在土府十有六月。公暇無事。茲萬延元年庚申七月十八日。癸江都廿六日。登富士山。廿九日到豆州。浴熱海温泉十有四日。愛玩山海奇勝之餘。建此石。使後人知英人遊于此。自吾輩始矣。

明治五年十月二十日寫

神光輝照。禪師藤原。藤房公碑銘并序。
中古以還。英雄之與。莫盛於元。功建武而苦。
諫切實。為皇家獨竭股肱之力者。以藤原藤。
房公為巨擘矣。公初名惟房。權大納言宣房。
長子也。任左大辨。歷參議。至權中。納言。兼左。
兵衛督。捨非違。使別當。叙正二位。為後醍醐。
帝腹心之臣。鞠躬盡力。與帝共艱苦。其精忠。
垂竹帛。公嘗以內寵甚熾。賦役荐起。數諫。帝。
帝弗聽。又擯天馬之獻。帝怒。形于色。於是公。
謂為臣之道。於我盡矣。決然挂冠而去。入北。

山為僧。後復召之。不應而逃。詔問吏物色之。弗得。蓋公之志在改悟帝心。去之者非忘君也。或曰。公之去之。愛身也。非忠國也。吁。何冤之甚也。禮曰。為人臣之禮。不顯諫。三諫而不聽。則逃之。公之直諫。激切嚴正。有超于禮者。冒所云。王臣蹇蹇。匪躬之故。蓋公之謂乎。公當栖隱之。取宣房親馳而訪之。公既去矣。乃遺國歌一首。暨棄息。入無為。真實報恩者之句。又見贈藤原實世歌。心情誠實。自溢于言表矣。余以為公輔弼皇家。誅鋤姦臣。撥亂及

正。挽回天日。將頹之運。其勳功。與日月均耀。可謂國家柱石之臣矣。然而取未泰。人未和。王綱漸弛。賞罰不信。是以規諫焦心。議論爛舌。其言不用。廟堂大夏。殆將顛墜。是以公之見機。晦跡。欵公。後參閔山國師。傳衣鉢。為妙心寺第二祖。其夏蹟。備載本朝高祖傳。暨延寶傳燈錄。其苦修練行。可想見也。康歷二年三月廿八日。示化塔于寺域。天授院萬治二年。殊勅。謚神光。寂照禪師。其德光不泯。表旌于後世。豈不偉哉。夫君子行藏。有凡倍不

可窺者。如公進則竭忠為皇家干城。退則悟道為釋天泰斗。達真諦者未嘗不達俗諦。所謂大乘菩薩。或現宰官身。或現比丘身。龍化豹變。不可端倪者欵。儻使公生於今日。上匡濟治安之籌策。下恢張仁慈之教法。蓋有不測知者。雖然。今之皇運再昌者。安知不有公之冥護默祐者耶。今茲己卯三月。正丁公之五百回忌辰。同志者相謀。樹碑伊豆國加茂郡熱海村溫泉寺境中。以勒其功德於無窮。寺公之所開創也。銘曰。君臣大義。人倫最

重。元弘之役。壯士接踵。藤公當路。鼓舞驍勇。誅戮奸賊。一掃遺種。奈何北雞。司晨專罷。建謬利害。言路蔽壅。不勝泣血。逃跡憂愁。竭誠祈佛。寶經手捧。只期天運。皇圖砧鞞。閱五百歲。再貢珪璋。道眼如炬。誰不推奉。明治十二年五月

大教正華頂山貫首順徹定撰文
太政大臣從一位勳一等三條實美篆額

大内青巒書

宮龜年鑄

熱海温泉図彙

廿一才

温泉寺 妙心派

上町ノ西三町余傳ニ曰ク文治五年頼朝ノ創構中奥用山
 授翁和尚ハ南朝ノ賢才万里小路藤房卿ナリ此地ニ遷居シ
 テ桑門ニ入り授翁ト号シテ此寺ニ住シ玉奥禪寺ヲ兼自画
 像アリ寺ノ庭中ニ授翁自裁ノ迹今ニアリ授翁故洛ノ
 後勃ニ依リテ妙心寺二世ニ住シ玉寛永七年高徒ノ開工高キ
 雲居禪師此地ニ錫ヲ留メテ温泉與禪ノ兩寺ヲ兼住スコレヲ
 近世ノ盛禪トス禪師後ニ奥州杵島ノ瑞岩寺再住入寂シ
 テ大悲圓滿国師ノ謚ヲ賜フ其傳ノ詳ナルコトハ元文三年ノ

明治十五年十月三十日寫

刊行雲居国師年譜ニアリ、(百樹アタミへ逗田ノアヒタ、此各
ヲ温泉寺ノ現住ニ借用シテ一覽セシニ、雲居国師ヲ開山或ハ
中奥ト云寺百七十三箇寺アリ、是ヲ以テ其從ノ高キヲ知ルヘ
シ、藤房卿ハ持モヒシ袈裟珠數、温泉寺ニ傳フ一覽セシニ、何
モ唐モノニシテ希世ノ珍器ナリ、

熱海日記サウ

伊豆日金山碑

伊豆國加茂郡日金山頂所觀望者十國五島

自子至卯相模國武藏國安房國上総國下総國

南自辰至申其國所隸之五箇島及遠江國

自酉至亥駿河國信濃國甲斐國

天明三年八月東都林居士諸島出雲光英源清候
等應熱海里長渡邊房求之需建之

遊豆小志

十丁ウ

松崎惺堂

五里達日金地藏堂主者三四屋亦在家僧也、又
 行半里右折而上、半里而遠曰九山日金巔也、山
 身南連天城北屬箱根草茅滿目、蓋天下陋觀也、
 然而其名于勝概者、皆自他山而來、甚矣羅澤之
 不可以已也、側有天明中都人林諸鳥所建石刻
 四至望亦譜文、摸與之壺碑、其陋則碑所無也、天
 朗日、霄眼界愈豁、十國武藏二總相摸安房甲五
雙駿河遠江信濃本州

島初島大島利島三宅島神津島粉白黛綠赭赤蟬黃掩映前後
但春夏之際游氣微敷不及殊冬清澄為憾已略下

明治六年六月初三抄

豆州山中村宗閑寺鐘銘並序

自造函根西下十里許山中村有寺號宗閑在昔間宮康
俊也者事北條氏忠烈果毅教有先登之功特居羣士之
右食邑萬石天正中秀吉帥大軍東下也氏直使康俊以
屬兵五千人保山中城秀吉分兵攻之急小大實不可敵
而不懼之勇以身殉國遂力戰而歿年七十三其臣瘞
埋屍於城中請僧襄度法諱宗閑號普光院武月潔公先
是康俊有一女神祖選充侍御恩寵殊異父戰死之日悲
泣哀慟出于天性追慕之情經年而不衰私心誓之捐所
有之具創起一字以薦冥福至孝所撼神祖允其志願於

陀

是就先瘞之地構造有會不日成之賜陀尊像什器及東月山普光院宗開寺之號使僧了了的者為主尔未曠年弥久寺有與廢云寬政中頂替連城也者住持于茲香花敬薦淨業無怠嘗告予曰兩夜寐：耿而不寐偶有所見鬼火炯爍或鬼哭哀號傷心哉審之古老所聞見已久竊思之昔敗兵刃相交伏尸流血之地怨冤蘊結無依無托所以致妖氛乎所謂驚念無量劫實可憫哉至若一切衆生以無量罪緣沈淪於三途而受苦無間苟為佛子者有度衆生之誓願在豈忍居然視之雖然吾寺凡庸慈力所限獨奈之何蓋以鳴鐘之為德經史所載其益甚大也夫

登而呼音達五十里少用勞予得益於佛門法器莫若鳴鐘者於是出都晉諫間宮友三郎光德間宮五郎左衛門綱俊將集其夏若夫都下分衛追沼八重郎雅智其先世先生氏雅戰死於山中城為之紀綱普募緣於四方踰越春林以得清淨財若干爰寬政七年乙卯春三月廿九日洪鐘新成矣願以此功德風雨以取穀稼饒熟四海同樂永康之年施者及隨喜者乃至法界羣生怨親平等皆資法潤悉到安日養淨刹云一日客告城云師之垂慈可謂勤矣抑人亦憂山谷之居民雲霧如晦不辨咫尺當此眩也作夏失錯殆誤晨昏撞鐘報敗其利亦不為少矣城悅曰吁子也起予

者夫諸佛之大悲晝夜六時觀見可度衆生無有遺漏矣
人而有心每時觸耳則安有不思無常之期逼身而培善
根者乎有是哉諸佛之緣衆生之因所謂感應水月映乎
不可失矣因申此言以乞銘於予叙以作銘銘曰
鼓之鑄之華鐘圓成比方何物至人之精虛而不屈扣擊
愈鳴響流法界百車轟轟魑魅遠跡魔軍可驚三途脫苦
五濁斯清此土數體存于音聲金口詎誣厥德明明嗟乎
萬年嚴護法城

寬政九年丁巳春三月 增上寺大僧正嶺譽智堂

竹字休書 井清風鑄

明治五年十月廿一日午前寫

穗向屋集第四卷

市川玉樹が碑詞

竹村茂雄

此墓を市川玉樹と其妻と子とを改さ其
る墓を玉樹の父を山中村乃市川の家族第三
子尔乙安永乃中乙改く、に移りて此さと人
おれり々利玉樹は天明八年三月三日迄生花を
雅さ時々里文をむあとを好員て親おつらぬる
いとまふ是古書を讀く國の道をさと里家業を
務む餘りにハ歌卷を見多みや比南邦わざ成
堂のしる三島の杜乃花は盛ふを思ふと打む
しとあやみる言は葉をのむ管根の山乃月法

光永は獨りふれ出さずかき歌をれが先人乃
耳を驚らし心を慰免を致すと著しく奈の能事
其折の歌と詞とを書法ら録し一卷とるし置
とれ婆くく亦々洩しぬさて文化七年管根の里
と利妻を迎へて男子也と里々勢たりをを明
暮も海より海途の海見をぐ、其を何く悪と
い書し其つと免る哉いり那子福津日の神代
御心永の其十年といふ年の四月乃をい免つ
きより家内こ其里をえ居るふわ法ら也くその
月乃末小三郎を里々海弟を身罷り父と妻とは

弟ふあけの如く老老の員が老老をた満なり
たり玉樹をた若しき病の床の老益良雄心を
婆うし那を傳父の病しなを老老を海電のしけ
るされやなり、亦身め弱く利中或或五月五
日は今のさ海番を里々利人、いりおれり
は津子おのとる老死さしげハ老老なる老目を
見用おる硯笺しと勢わのなうらむ後のおきを
ととあ海々に書法しなすておくお、老人會
一日も屋を後目を見さずさきを途てゆく我交
悲しり、夏の夜の小川永沈む月々老老をうれ

記物をうゝ世あり字理といふ歌を書てさし置
やうてえこれ九成小之利年二十六小南其成
亦希安かく行末こも頼あ事座をの子姓古学小
さやいそしお里余若半悲しとも悲しく惜むに
も猶餘り安利と涙小れお、も安ものハ世小れ
お里希利系くて又後五日登て妻もれ九系り其
月乃末小父を空し九成小を里次郎をりを係弟
むり理この禍を道き多こく飛あ乃墓小碑を建
むやてお終お詞をこむとむおのれもをしを
子小加死し若うと那もかいあるみそい 其難くと

華のゆくへも見えわ、祿とつれなくたしのご
飛て事決ありさ海を書体、筆安

故是柄縣令正五位柏木君碑銘

陸軍大將兼左大臣二品大勳位熾仁親王篆額

改
明治丙子春詔廢是柄縣分其地隸靜岳神奈川兩縣以前是柄縣令柏木君治効異等特旨叙正五位賜金三百圓既而君病不起復賜金二百五十圓充祭案料而門生故舊痛惜不已僉曰漢宣中與岐功於良二千石今君收績如彼付之泯滅無聞可乎乃請余撰銘樹碑墓道聖上聞之又賜金若干圓君諱忠俊小字莊藏後改總藏姓柏木氏曾祖諱包照祖

諱保秀父諱忠榮世為伊豆韭山縣吏弘化中幕府
命縣令江川英龍巡視七島君年二十三以屬吏從
嘉永癸丑復從巡視武相房總沿海地形明年率望
月大象矢田部卿雲等往長崎就蘭人講習礮術及
航海造船諸技督勵備至其業大進還則列藩士大
夫多未學者江川氏之門出才雋君与有力焉先是
英龍及嫡子英敏相踵病歿次子英武幼冲襲職君
竭力輔翼闔境大治是冬詔廢幕府明年戊辰改元
明治八月選為徵士尋任會計官推判吏車駕東巡
以本官總管沿道金穀出納驛遞管繕等吏十月

兼監鑛山吏己巳八月遷韭山縣判吏兼掌檢閑左
八州物產七月轉大參吏叙正七位辛未四月廢韭
山縣置豆柄縣因為本縣參吏壬申秋進權令叙正
六位明年拜真叙從五位戊寅十一月二十九日病
卒越三日葬於韭山本立寺先塋之次年五十有五
初娶蘆川氏生子康之助娶清水氏生鐸次郎並先
歿後娶川村氏無子君好讀各史練達吏務性沈毅
寡言謹讓不伐而慷慨憂國臨難不苟避少為江川
英龍所器使兩野總武博徒橫行帶劍劫人誦為長
刀黨州里力不能制一夕其黨聚茶萸澤君提小銃

与吏役往捕途遇二贼即缚之探知渠魁所匿黎明
襲其不意破户入贼尚在蓐中駭起揮刀乱斫君支
以銳柄轉身斃射殪一賊餘黨踰垣遁追殺一賊遂
益捕獲之英龍嘗欲募鄉兵修武備不果君承遺志
設立方法管内民口除去婦幼有七萬九千二百人
就百取一得七百九十二人置二大隊隊各三百四
人又分一大隊為八小隊隊各三十八人總計六百
八人所餘百八十四人用為撤兵凡十村出二小隊
一為常備兵一為豫備兵五年更代十年免役農隙
操練課富戶辦費用有吏出征無吏備盜其法甚便

因上層幕府請施之諸州不許及王政維新頒徵兵
令其制略同世服其先見其莅任地方也年穀不登
海無漁獲乃諭部民募集金穀以相賑恤因設救荒
法凡田一石課粟五合人各儲三合積至數年糶易
金幣出舉收息備凶荒又設生產會社製絲會社物
貨流通高民大便之賀茂郡有湖山岳四周民居水
濱日池村大雨一澍行潦漲溢歲損稼禾距湖南十
餘町有村日八幡野昔收噴火泉脈為酒土人百七
十戶設槽畜雨水一遇久賜輒欠飲料君測地勢鑿
竇山腹引彼灌此兩地民免旱澇各得良田數十町

賜

息 同郡岩科村青野村地曠草美令土人開牧場官給
洋牛種數頭曾不數年蕃息至數百頭君澤郡山中
民墾闢馬改地君為經畫一村利賴因建壽碑歲取
祭享報其恩蓋封建廢為郡縣分合轉徙不一而足
新任守令朝去暮來動輒革舊法怨嗟隨與君之於
持 茲土久任不遷休養生息漸以歲月一切施設務符
大計上意下通人無間言嗚呼君循吏也良二千石
也古所謂所居民富所去見思生有榮歸死見奉祀
者即其人矣余載筆憇省職在論撰則不為君銘而
誰銘銘曰

為民父母心存撫字史筆立傳謂之循吏蝗入海水
帝去郡界曰甘露降曰鳳鳥至德化所感天賜祥瑞
理或可然跡涉怪異惟君蒞任除害與利偕冠留侯
長見遺愛我讀厥狀據實而記不敢諛墓垂信來世
明治十五年八月

宮內省四等出仕從五位川田剛撰文
修史館監叟從五位勳五等巖谷修書

廣羣鶴刻字

南汎錄首附

八丈島西山卜神居記

羽倉簡堂

嶽南海絕島其鎮曰西山單椒孤豎頂有天池能出
 雲雨山陰小丘曰元乘曰手石二丘之間坦而饒樹
 俗以為海神所栖止呼曰神止山文化中島人與一
 建白斬樹伐石壑為麥田歲果增收其民以飽天保
 紀元以來洪飈屢作害及舟楫人咸駭曰神失其居
 故有此變請奉向所闢歸之榛莽牒入余謂不然島
 之險遠漕運難恃每遭闕乏輒閉口待哺有類輒鮒
 父老相傳民及五千必有飢者今也口僅一萬用壑

八丈島

明萬曆六年五月十六夜依瓊崖家飛揚帶道

不加又欲併其既闢者廢之不亦謬乎夫災降有數
認數為神不可且神以濟庶為心吾知其所愛惜在
此民而不在此丘也雖然神無定居民乃迷瞻仰茲
晉命史胥漁為民等卜西山佳處以為享食所其樹而
不廟者仍舊貫也蓋此舉出九獨斷島人不共如有
神責殃咎宜在九身九不敢逃九遙管此地恐其或
有後言乃刊貞珉以告未茲天保甲午歲四月朔羽
倉用九撰

文恭公實錄卷下

十七

天保五年四月朔日八丈島特出南海屬伊豆先是
外記羽倉用九以豆駁代官管轄之島有山海神栖
處文化中墾田頃有溺舟僉謂宜葦墾田以鎮神崇
也用九作文曰災降有數認數為神不可况神以濟
庶為心乎知其愛民而不愛丘也今卜神居此舉九
獨斷島人不知神責宜加咎吾身不敢逃刻石告後
昆果無恙

開拓小笠原島之碑

明治中興革新諸政大拓疆域六年右大臣
岩倉具視奉旨下小笠原島開拓議臣利通
承乏內務卿與外務大臣海軍諸卿議上方
略制可乃遣外務省四等出仕田邊太一等
往視之太一等還具狀以聞九年命內務權
少丞兼地理權助小花作助勸誘土民墾田
栽樹捕魚牧牛以統轄全島初文祿二年小
笠原貞賴始捨出此島建木標以表我版圖
因名小笠原島延寶三年幕府遣島苔某巡

視其地。享保十二年。負賴曾孫貞任。紹祖志。
自詣而往。漂流不還。既而內民稍稍移住。外
人亦有來駐者。文久元年。遣水野忠篤等。撫
輯居民。頒布法令。建碑記顛末。而國家多故。
經營未周。所以有待於今日之舉也。蓋我邦
之為地。海水四環。伊豆東南。北緯二十五六
度。至三十五六度。屬島星羅。而本島居其一。
甲斐伊豆之山脉。蜿蜒起伏。至於此而盡。乃
我南門也。不置官司。以鎮焉。則居民不能安
其業。嗚呼。民安其業。吏修其職。庶幾不違新

政拓疆之盛旨也歟。

參議兼內務卿從三位勳一等大久保利通撰并篆額

太政官大書記官從五位下部東作書

大日本國紀元二千五百三十七年明治十
年十一月建

廣群雀刻

